

〔翻訳〕

H. H. フーベン『ゲーテのエッカーマン ― ある控え目な人間の伝記』(9)

林 久 博

32. ワイマルからの逃走

7月初旬、エッカーマンはゲーテを愛するが故に21年前には人生の輝かしい目的地に思えたこの町から出て行った。心のギリシアを求めてこの町にやって来たというのに――。これは債権者からの正真正銘の逃走だった！ 彼は借金で首が回らない状態だった。払ってしまえば飢え死にするしかなかった。手持ちの「現金」は60ターラーで、プロイセン王からの下賜金の一部だったが、最後の頼みの綱として大切にしていたものだった。前年に約束していたこの休暇に使用できるよう、大公妃は彼に50ターラー与えるのを認めていた。さらに彼は親友達からそれ以上の借金をした。だから俸給がストップしたり、債権者の差し押さえがあったとしても、差し当たりお金に困ることはなかった。ただ切迫した借金返済のために、支払われる俸給の一定額を大公の経理担当者の手に乗ねることにした。

ハノーファーから30分ほど離れた平地にあるリンマーという小村の宿屋に彼は部屋を借りた。宿屋の主人はレーレンといい、賄いと暖房とランプ代込みで一週間5ターラーだった。大公国の金庫から支払われるワイマルの宮廷顧問官の週給は、それよりもたった22グロッシェン多いだけだった！ ハノーファーの静かな田舎町の片隅で、彼は落ち着いて『対話』の第三巻を完成させたいと思っていた。そうこうするうちに息子は11歳になろうとしていたが、叔父のヴィルヘルムの所で暮らしていた。ヴィルヘルムは亡くなった妹への愛を甥に傾けていて、以前からこの子にはっきりと表れていた絵の才能を心から喜んでいて、ベルトラム家で暮らし始めて、この母親のいない少年は本当の家庭生活を見出すことができた。また幼い従弟とも遊び友達になった。田舎道が入り組んでいるために、父子が疎遠になってしまうという危機が秋に到来した時には、エッカーマンは郊外のリンデンに引っ越した。その町はハノーファーから橋一つで区切られているだけだった。彼はイーセンという名の年金生活者の家で暮らすようになった。

儉約するだけで長く暮らしていけるものではない。彼は依然として「自分の状況が有利な方向に進んでいく」⁽¹⁾ という淡い期待を抱いていたが、そんな希望はどこからやって来るというのだろうか？ この夏、静かな田舎で熱心に取り組んでいた『対話』の最終巻が完成したとしても――それを出版することなど考えられなかった。というのも、一年前からブロックハウスと裁判をしていたからで、それがいつ終わるか見通すこともできなかったし、その出口も不確かなものだったからである。最初の二巻を出版したブロックハウスが第三巻を出版しなければ、エッカーマンは第三巻をどこから出したらいいのだろうか？ 世間知らずのエッカーマンは、裁判中にも関わらずブロックハウスと合意する可

能性を当てにしてい、それを失いたくなかった。というのも、作品全体を一人の出版者の手で終結させるのが最良の方法だからである。もし貯金が底をついてしまえば、誰が助けてくれるというのだろうか？ もう一度フンボルトに相談した方がいいのだろうか？ フライリヒラートの離反によってプロイセンの年俸に空きが出ていたが、それに申し込む手紙の草案がエッカーマンの遺品の中から見つかっている。ただ実際に申請書を送ったかどうかは定かではない。それにしても、ワイマルの宮廷顧問官エッカーマンに対して、プロイセンが年俸を与えることなどありえるのだろうか？ もしそんなことになれば、当然の義務を怠っているワイマル宮廷に対するエッカーマンの公然の批判ということになるだろう。いずれにしても、エッカーマンがこの年俸をもらっていないのは確かである。彼が唯一望んだのは、ワイマルにいたら生活を維持できないのを皆にも分かってほしい、ということだった。

ワイマルの人々は、エッカーマンが数ヶ月前には皇太子と活発に付き合っていたのに慌ただしく出発していくのを見て、少しばかり意外な思いがしたことだろう。しかし彼がある種の風変わりな人物であることに慣れていたし、この孤独な男がしばらくの間、親族と一緒に過ごす必要性を感じるのも当然と言えば当然のことだった。大公家との個人的関係は揺るぎないものだったので、彼は官吏として期間を定めることなく休暇旅行に出た。彼を追い立ててくる仕事に対して、書面で意見を述べるのは煩わしいとも思わなかった。

1844年7月31日、皇太子の最初の息子が生まれた。祝賀客の中でエッカーマンは当然なくてはならない人物だった。彼は個人的にお目にかかれな残念がったが、それは比較的長期に渡ってワイマルから離れる準備をするための打って付けの機会だったし、その理由を示唆するよい機会でもあった。ワイマル宮廷とエッカーマンの関係にとって皇太子の存在は極めて重要な意味を持っているが、このお祝いの手紙以降、皇太子との間で膨大な量の手紙がやり取りされ、活発な議論が繰り広げられた。それどころか、これまでの決算についても話題となったのだ！ 1830年、イタリア旅行に出かけてゲーテの影響圏から逃れ、これまで抑圧されてきた自分の願望を初めて師匠に伝える勇気が見出せた時と同じように、彼は1844/45年、故郷に身を隠し、居城での重圧から解放されることで、初めてワイマルに対する正直な気持ちを吐露する勇気が持てたのだった。もはやあの臆病で控え目なエッカーマンではなかった。彼の中には憎しみと怒りが渦巻いていた。

どんな気分でエッカーマンはワイマルに別れを告げたのだろうか。それは遺品の中から見つかった未完成の詩の冒頭に記されている。

ああ、媚びへつらう間抜けな廷臣に囲まれた
見かけだけの虚飾の宮廷よ
もう金輪際
お前に会うことはないだろう。

エッカーマンの怒りはこれ以上続かなかった。だが彼の遺品の中には、もっとはっきりと心情を吐露する別の紙片が見つかっている。おそらく40年代の社会政治的叙情詩に対してエッカーマンが関

心を示して書いた唯一のものだと思われるが、それは「ある若い侯爵令嬢」に向けて書かれている。
——その令嬢とはおそらく若き皇太子妃ゾフィーのことだろう。

あなたが住んでいる家
あなたがお座りになっている安楽椅子
衣服、手に付けている装飾品
壁に掛かっている絵画
あなたを教導く本
あなたに栄養を与える食事
現世から逃れるために
あなたがひざまずく大聖堂
これらはあなたのために考え出され
あなたのために作られたのです。
市民的な精神によって
市民的な巨匠達によって
非の打ちどころのない熟練の技によって。
しかし貴族の位はあなたに何を与えてくれたのでしょうか？

この問いに対する回答として、彼は次のように書き込んだ。

あなたを養う農夫を
あなたを教導く市民を
そしてあなたを消耗させる貴族の位を与えてくれたのです。

33. 報復行為

跡継ぎの誕生を祝うエッカーマンの手紙に対して、カール・アレクサンダーは1844年8月23日に返事を出した。この手紙は最初から最後まで友好的な調子で書かれていた。カール・アレクサンダーは雄弁にこう述べている。ワイマルであなたは「愛され、尊敬され、面倒を見てもらっている」⁽²⁾ ので、この地だけがあなたの本当の故郷なのです、と。ここに脅迫的な意味が含まれているのは間違いない。皇太子はこう続けている。もしワイマルに戻って来られるのなら、あなたには「確実で決定的なもの」⁽³⁾ が残されています。つまり年金です。また前にもお約束したように、御子息の教育費用も用意します。おまけに、将来あなたがご自由にお使いになれる住まいを提供するのも大公妃は「嫌がっていません」⁽⁴⁾ ——ですが、もしあなたがハノーファーに留まっておられるのであれば、あなたへの債務を我々が放棄してしまったように感じてしまうのです！ あなたがワイマルの「一員」⁽⁵⁾ である

場合のみ、ワイマルを当てにすることができるのです！

最初からエッカーマンの判決はこのように下されていたのだ！ いざとなれば息子の教育費は断念できるだろう。息子のカールは叔父のベルトラムの所で手厚い世話を受けていて、将来の教育に関しても配慮がなされていたからである。後見人によって管理されていた母親の財産が 1000 ターラーあり、ジュネーブには息子のために 2350 フランの財産があった。それは最近亡くなったエスペランス・ジルヴェスターが古い友人の息子に遺贈してくれたものだった。だが 300 ターラーの俸給はエッカーマン自身にとって最低限必要な費用だった。それなしでは困窮してしまい、ライフワークの完成も考えられなかった。この惨めな 300 ターラーは僅かばかりの特別給であったが、自分で稼いだものであって、反論の余地のない要求に応えたことで得られたものだと思っていた。これは細くとも彼をワイマルに繋ぎとめる強固な糸だった。その糸が彼を隷従化させ自由を奪ってくるのだ。

エッカーマンはこのメッセージに暗澹たる気持ちになって、二ヶ月の冷却期間を置いた後、ようやく 10 月 21 日に勇気を振り絞って「私の個人的な状況とハノーファーの故郷の滞在に関する返答」⁽⁶⁾を出した。返答の見出しは——ワイマルではなく「ハノーファーの故郷」となっていた！ すぐ第一段落には「私の精神と勇気は砕け散ってしまいました！」⁽⁷⁾と書かれている。「ワイマルで近年味わってきた日々の労苦のために、私の中で多くのものが砕け散り破壊されました。」⁽⁸⁾この文の後に、自分の「惨めな状況」⁽⁹⁾を包括的かつ隠し立てすることなく説明するための導入文が続いている。「私がワイマルを去ったのは思い上がりからではありませんし、不満からでもありません。ひどい困窮に耐えかねて飛び出さずにはいられなかったのです。これが取り除かれぬ限り、ワイマルに帰ることなど考えられません。」⁽¹⁰⁾彼は自分の収入の正確な数字を挙げて、次のような結論に達した。「立派に」⁽¹¹⁾ワイマルに帰れるよう、まずは借金返済のための 500 ターラーが必要です。「救いようのない生活上の必要に迫られてワイマル市民から」⁽¹²⁾借金をしていましたし、「親友の何人かから」⁽¹³⁾最近も借りたばかりです。さらに家計を立て直すために二三百ターラーが必要です。また私が「本当に上機嫌」⁽¹⁴⁾に来年の冬を迎えられるよう、固定給として 900 ターラーは必要です。「それが叶わないのでしたら私はまた前と同じような憂慮に囚われて、すぐに身を滅ぼしてしまうでしょう。」⁽¹⁵⁾宮廷顧問官の同僚達はどれくらいもらっているのでしょうか？ ワイマル美術館長シェルは 1200 ターラーもらっていますし、上級司書のリーマーも同じくらいです。お金のかかるワイマルでは、この二人であってもほとんど生計を立てられないでしょう。皇太子の秘書で宮廷顧問官マーシャルだけは 1800 ターラーもらっていて「非常に誠実に支払われて」⁽¹⁶⁾いますが、彼も沢山お金が残っているわけではありません。もっと高く支払っている所だってあります。ディンゲルシュテットはヴェルテンベルク王の私設司書として 1800 グルデンもらっていますし、ハノーファーの皇太子に「最新の文学について時折報告している」⁽¹⁷⁾宮廷顧問官などは 1500 ターラーもらっています。ハノーファー出身で、ナッサウの王子の家庭教師をしていた二人の男などは全くの無名ですが、1000 ターラーの年金をもらっています。「私のようなとても貧しい事例は全く聞いたことがありませんし、だから知らない人達も皆、私に同情するか薄笑いを浮かべています。」⁽¹⁸⁾

エッカーマンは大公妃の私設司書を務めながら、「最新の文学について時折報告して」いたし、さ

らに昨年の冬からは皇太子妃ゾフィーにもドイツ文学の授業を行っていた。この授業をすることでエッカーマンは100ターラー余分にもらっていたが、そもそも彼は皇太子の教師だった。——上に挙げた例と比較すると、彼は一人で三つの職を兼任していたわけだが、お金のあるワイマル宮廷からは300ターラーで片付けられていたのだ！ 皇太子がこの数字にうしろめたさを感じるのは当然である。だったら状況はもっと改善できるはずだ。こうしてエッカーマンは——直接的ではなく外交官のように間接的に——8月23日付の皇太子の手紙に対して次のような文面を認めた。⁽¹⁹⁾「確かにワイマルは私の第二の故郷と言われていましたし、お人好しな自己欺瞞に陥っていた時には、時々私自身もそんなふうにおもうとしていました。——しかし国で最も権威ある方々に対して称賛に値する幾多の労苦を重ね、非常に親密な関係を築き上げて二十年もの間この地に滞在しても、50歳で年300ターラーの固定給しか支払われず、極貧生活を余儀なくされ、いやそれどころか状況次第でどんな年金も払われることなく免職もありうるのだとしたら、そんな故郷は本当の故郷ではありません。そのような関係性に立脚した、これほどまでの長期に渡る滞在は、リュネブルクの荒野からやって来たお人好しの田舎者にだけ起こりえた、実際の失敗例として同情されるものなのでしょう！」⁽¹⁹⁾

それからエッカーマンは——カーライルの著書『過去と現在』に倣って——ワイマルの過去と現在を比較した。カール・アウグストはあなたよりも資金が僅かでしたが、数千ターラーを使って、その時までは無名だった居城を世界的に有名にしましたし、その名を不滅のものとししました。この輝かしい過去が一つのエピソードに留まっているのは極めて残念なことです。ワイマルは今では「千切れた糸となって放置され、再び結び合わされることがない」⁽²⁰⁾ ままです。才能ある全ての人に対して、ワイマルが依然として精神的な魅力を持っていれば、「少なくとも以前はこの町が豊かに享受していた文学的名声の一部を守る」⁽²¹⁾ のは簡単だったはずですよ。

この手紙は差し迫ったお願いの言葉で締め括られている。それは『対話』の第三巻が完成し、ブロックハウスとの裁判が終わるまで「愛する故郷に身を隠して自分を癒したい」⁽²²⁾ という言葉だった。

ワイマルに対するエッカーマンの責任追及は請願書の形式で行われ、これに皇太子への個人的な添書を同封した。これほど長きに渡って自分の「真情を吐露する」⁽²³⁾ のを先延ばししてきましたが、「寛大な考慮」⁽²⁴⁾ をお願いしたい、という内容がこの添書に記されていた。だがその後はあたかも何事もなかったかのように、生まれたばかりの王子のこと、ハノーファーのガイベルを訪問したこと、カーライル、アウエルパッハ、ヴィートマン、オーレリ、最近亡くなったアルマ・フォン・ゲーテ、そして息子のカールことを話題にした。彼はこの添書の中で請願書の言及を和らげるようなことは全くしなかった。だが依然として「ワイマルに小さな詩的・文学的な団体」⁽²⁵⁾ を作りたいというカール・アレクサンダーの計画は考え続けている、という姿勢だけは示そうとした。

五週間後に返事が届いた。その手紙は皇太子の好意溢れる一面を垣間見せるものだった。休暇を延長し、大公妃も年金を支払い続ける「つもりである」⁽²⁶⁾ のを知らせることで、ひとまず皇太子は「親愛なる博士さん」⁽²⁷⁾ を安心させた。しかしそれ以降は言葉を慎重に選びながら、あらゆる非難に対してワイマルを擁護した。あなたの公明正大な性格に特有の、ある種の辛辣さというものが、あなたの口から不機嫌に発せられています。ですが、あなたの攻撃は「少なくとも必ずしも正義に基づいてい

ない」⁽²⁸⁾ のではないでしょうか、と。もっとも皇太子は、エッカーマンによって挙げられた比較のための数字を用心深く無視した。だが全体的に見て皇太子の返事は心のこもったもので、最初の手紙に書かれていた、有無を言わさぬ命令口調をいくらか和らげるものだった。エッカーマンは核心に到達したのだ。つまり、当分の間ハノーファーに滞在してよいことになって、年金の剥奪も差し当たり話題にならなくなった。借金の返済についても同様だったが、借金を返済してもらえれば、ワイマルの人々は彼を締め出してしまうことだろう。

さて、とにかく彼は初めて親子水入らずのクリスマスを祝うことができた。裁判の見通しも悪くなさそうで、『対話』の第三巻にも落ち着いて取り組めたし、気分も晴れやかだった。12月5日には皇太子に感謝の手紙を送っているが、その手紙は行方不明である。休暇を延長してもらったことにあまりに「大喜び」⁽²⁹⁾ してしまい、皇太子を「怒らせ」⁽³⁰⁾ てしまった。1845年1月19日に皇太子自身がそう書いている。

新年初め、またしても不気味な雲がエッカーマンの上空に垂れこめてきた。エッカーマンはブロックハウスに不利になる証拠を提出しようとしたが、裁判所がそれを許可しなかったのだ。——これは判決に至る上で良くない兆候だった！ もしエッカーマンがブロックハウスに負けてしまえば、更なるどん底に突き落とされてしまう！ もしそうなったら、かつてワイマルのパン屋や肉屋で借りていたお金の上に、さらに自分から全財産を奪ってしまうに違いない借金が積み上がってしまう。執行官は容赦してくれないのだ。『対話』の第三巻は完成には程遠い状態だった。——ごく身近な将来に絶望的な展望しか描けないというのに、どうやったら冷静さと上機嫌を取り戻せるというのだろう！ 第三巻という担保がなければ、ワイマルに足を踏み入れることなどできないのだ。

こうした深い絶望の中でエッカーマンはフォン・ミュラー長官に相談に乗ってもらい、希望を抱けない状況にあることを説明した。そして、たとえ自分が「外国」、つまり故郷にいたとしても年金を取り上げないでほしい、という申し立てを長官に取りなすようお願いした。この手紙は見つかっていないが、極めて苦しい状況から発せられた叫び声だったのは間違いない。それは1845年5月5日付の皇太子自身の返事を見ても明らかである。カール・アレクサンダーの返事には、自らの興奮を押し隠せない質問事項がびっしりと記されていた。皇太子は温かい慰めの言葉をかけながら、自分が救済行為を行うつもりであることを示した。皇太子は自分のことを慈悲深いサマリア人⁽³¹⁾ のように感じ、ありったけの力を振り絞ってともに道を歩んでいくつもりだし、全部が全部そんなに悪くなりはいないと言ってエッカーマンを慰めた。ただ皇太子は、この疲れた放浪者たるエッカーマンがまだ身動きできるかどうか尋ねなかったし、エッカーマンがすっかり弱り切っているのに気付いていなかった。またエッカーマンを元気づけ、空腹や喉の渇きを和らげるどんな試みもしなかった。ある時、皇太子はすっかり詩的な気分になって、木蔭たるエッカーマンには巻き付いて上昇していくためのがっしりした樹木が必要だ（本書第36章参照）とゲーテに話したことがあった。この「がっしりした樹木」⁽³²⁾ と皇太子が理解していたものは、エッカーマンにはぐらぐらして折れやすい棒でしかなかったのだ。そして最終的に皇太子が並べ立てた有難いお言葉は、前年8月と同じような命令口調へと変わり、少しばかり軍隊的な簡潔性が加わって、さらに厳しいものとなっていた。皇太子はそうこうするうち

にプロイセンの甲騎兵少尉となっていたのだ。それ故、手紙受領後一週間以内に返信されたし、とも書いてあった。エッカーマンは「可能な限りのあらゆる支援」⁽³³⁾を受けることになっていたのではないだろうか？ でもどんな支援を？ それについて手紙には何も書かれていなかった！ もしあなたが外国にいるのなら、俸給は諦めてもらわないといけません。ワイマルはあなたに対してもはやどんな義務も感じてはおりません！ 手紙にはそう書かれていた。

もしエッカーマンがこの命令に従えば、小難を逃れて大難に遭うことになる。というのも彼は「支援」を受けられるかもしれないが、それが近年のワイマルでは苦痛でしかなかったからである！ またしても檻の中に入れられてしまえば、支援を恵んでもらうのがどれほど難しいか十分すぎるほど分かっていた。二回目の脱走ともなればうまくいくはずがない！ だから彼はハノーファーに留まって命令には従わなかった。むしろ秋に休暇を一年間延長したことを引き合いに出した。それに対して長い間何の返事もなかったが、俸給はその後も支払われた。やり過ぎはよくないとワイマルも分かっていたのだ。

ワイマルが関与していなくても、最悪の事態は起こるものである。この夏、ブロックハウスとの裁判はエッカーマンの敗訴で幕を閉じた。しかも途轍もない判決によって全費用が彼に課せられたのだ。もうこれで本当におしまいだ！ これからどう暮らしていったらいいか彼にはもう分からなくなっていた。ワイマルではせいぜい二三人の友人にお金をせがむことができたが、実際に彼はそうした。宮廷顧問官マーシャルがすぐに 100 ターラーを出して援助してくれたので、数ヶ月分の生活費を確保できた。8月10日、彼は控訴した。すると8月18日、ブロックハウスは『対話』の第三巻の出版社となることをすげなく拒否してきた。

そうこうするうちに休暇も終わりに近づいてきた。だからエッカーマンは皇太子と手紙のやり取りを再開しなければならなかった。10月26日、エッカーマンは皇太子に相談を持ち掛け、夏以降酷くなっている自分の状況について説明した。裁判に負けてからというもの、彼は「ゲーテという偉大で自由に心地よい存在」⁽³⁴⁾に隠れて第三巻を書き続けることが考えられなくなっていた。「私の所得の源泉が干からびてしまいました」と彼は書いている。「私は空っぽの両手を見つめています。旅立つために必要なものは何も持っていませんし、もしワイマルに到着しても、薪などの冬の必需品を買うこともできません。滞納した家賃や細かな借金の負債を即座に返済したくても何も持っていません。一言で言えば、ワイマルで私を窮乏から守ってくれるものは何も持ち合わせていないのです。——どちらかの町で暮らしたい、と言っているではありません。私は自由意志を持った人間ではありません。困窮の奴隷なのです。色々な状況に順応しなくてはなりませんし、その状況が私をこの地やワイマルに向かわせることになっても我慢しなくてはなりません。不幸に見舞われて落ちぶれた私の前には、ワイマルへの帰還に反対する障害物があって、それは乗り越えられないように思えます。ですが、この障害物は貴族の方々の目に入っていないのでしょうか！ ですから殿下はこう言ってくださればよいのです。来なさい、と。お前はこの地で今後何の心配もいらないし、飢えることだってない——色々頼ってくれていいのだよ、と。そう言って下されば私は行きます。」⁽³⁵⁾しかし今、私に「何の心配もいらない十分な状態」⁽³⁶⁾を用意していただけないということでしたら、しばらくの間故郷でそっと

しておいていただくことを、一つの恩寵と見做したいと思います。⁽³⁷⁾

このエッカーマンの手紙を感動なしに読むことなどではしない。自分はこういった屈辱を味わわずに済んだのではないだろうか？ そう考えた彼の念頭にあったのは、おそらくフライリヒャートの手紙に書かれたベルネの言葉だっただろう。「偉大な人達の好意から逃れよ！ 彼らはお前にほとんど与えてくれないが、お前から全部奪ってしまう！」——特にお前のプライドを！？ 一方、カール・アレクサンダーが手紙の中で非常に好んで引き合いに出した「世間」に対して、ワイマルが真面目に取り組む時間は十分にあった。ゲーテの友人であり皇太子の教師であり、『対話』の著者でありワイマルの宮廷顧問官であるエッカーマンを飢えさせるという恥ずかしい見世物を、果たして見せてもよいものだろうか、と。彼の状態も十分に分かっていた——なのにこれ以上何を待つというのだろうか？ だがエッカーマンはエッカーマンで言うことを聞かなかった。——一年前に彼が行った報復行為は、皇太子や、それ以上に誇り高い大公妃の神経に触るものだった。だから自分の教師だったエッカーマンに対して皇太子が「心からの愛」を述べて、大袈裟な言葉を並べ立てたにも関わらず、エッカーマンの提案は認められなかった。彼は宮廷に養われる人物に相応しい礼儀を身に付けねばならないのだ。10月26日の手紙の中でエッカーマンは確たる自尊心があったにも関わらず、受け取り手の耳に心地よく響く「恩寵」という言葉を用いたが、彼が身に付けねばならなかったのは「恩寵」としての礼儀だったのだ。今になってようやくワイマルも、「親愛なる博士さん」は何も間違ったことをしていないので何かしてあげないといけないし、とりわけ過去に決然とけりを付けて一定の保障を与えねばならない、という認識に傾いた。ワイマルという壁の中で物事を見たがる文学界の権威の中で、彼が依然として最も低賃金で働いていたのは間違いないのだ。

こうしてまずフォン・ミュラー長官が依頼を受け、エッカーマンの借金案件に取り組んだ。この宮廷顧問官の巻き添えを食わないことを確認した後で、皇太子は自分の「親友」であり「小さな博士さん」に対して、11月5日になってようやくある種の打ち明け話をしたのだった。皇太子はこれまで溺れている者に言ったとしてもほとんど意味のない「道徳的な説教」⁽³⁸⁾を言ってきたが、今ではそれを自ら笑い飛ばした。確かに皇太子は「ワイマルはエッカーマン本来の故郷である」という以前の話題に固執したが、それほど「心の調子」⁽³⁹⁾が悪ければ少なくとも生産的な仕事などではしない、という認識には耳を貸そうとした。エッカーマンが提示されるのを待っていたいくつか提案の中に、正しいものがあるのは皇太子自身もよく分かっていた。だが、それはずっと口に出さないでいた。ワイマルの借金の返済——最初に保証してほしいのはこのことだった。一言言ってくればいいのだ！ そうこうするうちに彼が時折支払ったことで159ターラーまで差し引かれていた「ワイマルで係争中の借金」⁽⁴⁰⁾のことさえ口に出してくれたら！ そうすることでワイマル市民の損害は補償されるのだが、それは彼を最も憂慮すべき懸念から解放するものではなかった。つまり皇太子は「我々には関係のない話」⁽⁴¹⁾と言って、裁判費用のことは用心深く無視していたのだ。用意すると約束していた「住まい」⁽⁴²⁾の代わりに、彼は60ターラーの補助金を受け取るよう言われた。——家賃は一年で72ターラーだった。さらに前と同じように皇太子妃にドイツ文学の授業をするよう言われた。授業をすることで「十分な金額」⁽⁴³⁾が約束されるということだった。結局、皇太子と友人達の負担で薪を無料でもらえるこ

とになったが——かなり慎ましい儉約生活をして十分と言えるものではなかった。家賃と同じように足りない分は自分で払わねばならなかった。最終的に息子のギムナジウムの費用は世話してもらえることになったが、それはずっと前から約束してもらっていたことだった。息子のカールは絵の才能があったので、おそらく将来は画家になるのだろう。

これがエッカーマンに差し伸べられた「領主の手」⁽⁴⁴⁾ だった——その手は彼自身のそれと同じくほとんど空っぽで、僅かな施し以外何も持っていなかった。皇太子妃の授業が長続きするという前提で約 200 ターラーが追加支給されたが、慌ただしい宮廷生活や社交上必要な行事や旅行を考えれば、長続きすることなどあり得ないだろう。もちろんこうした「改善」のあとで、更に恩寵を施してもらうことなど当てにできなかったし、1844 年 10 月 21 日の手紙に記されていた 1843/44 年の収入に見て取れるように、むしろ以前の方がましな暮らしができた。だが暮らしていけるだけの収入については相変わらず話題にならなかったし、またそれ以上に、彼が全力で抵抗してきた本来の「故郷」ワイマルへの帰還を取りやめるのも同じく話題にならなかった。実際の故郷にいたいという気持ちは理解されなかった。故郷にいれば、ゲーテ亡き後のワイマルで感じたような悲しい思いをしないで済んだのだ。幸運にも 300 ターラーの確実な年金が与えられて、それをハノーファーで使えたらどれほどよかっただろう。ハノーファー郊外の町リンデンの一室で、彼は穏やかな気持ちでいられた。それはこの十年間ずっと感じられなかったものだった。「リューネブルクの荒野からやって来たお人好しの田舎者」である自分が己の流儀で生活し、観光名所の一つとして自分が「所属する」よう言われていたうわべだけの宮廷文化から離れることができたことに、彼は「心から喜んで」いた。結局、彼もまた好き嫌いのある一人の人間だった。彼は早くも老け込んで、青春時代の思い出に囚われていた。というのも、彼の青春時代は辛いものだったが、それでも自由で幸福だったからである。離れていったこの土地に彼は舞い戻って来た。心はこの土地から離れられなかったのだ。この地こそが、ゲーテやワイマルの偉大な時代の思い出を奇妙に輝かせてくれた、最後のささやかな幸福の場所だった。『対話』の自伝的な前書きを書いたこの人物が故郷の大地に留まれば、もう一度同じような才能を発揮できるのは十分にあり得ることである。実際、そのような試みの断片は彼の遺品の中に残されている。彼が生きる現在という時は、彼にとって生氣のないものだったし、そこに居場所はなかったが、無理やりそこに押し込まれてしまえば、かけがえのない思い出、つまり偉大な過去は消え去ってしまうのではないだろうか？ だが——大公からもらったお金は田舎に残しておきたい！ チューリングンの外側ではもっぱら野蛮行為が繰り返されている、と言わんばかりの思い上がりが伝統的に受け継がれていたが、彼を呼び戻すことで何とかして「救済」してやらないといけない、とワイマルの関係者は思い込んでいた。束縛から逃れようと最後に足掻いている時に、フォン・ミュラー長官は彼にこう警告した。あなたは故郷で「肉体的にも道徳的にも落ちぶれてしまう」⁽⁴⁵⁾ に違いありません、と。だがワイマルはエッカーマンを「救済」するのに最も相応しくない場所だった——彼の哀しい晩年がそれを十分に証明しているではないか！

だが彼はそこへ戻らねばならなかった。彼は貧困の奴隷であって、自由意思のない人間なのだ。とは言うものの、彼にはまだ短い猶予期間が認められていた。もし他に何も望まないのであれば、休暇

は 1846 年春まで延長可能だった。だから最終決定を下すまで時間をもう一度稼ぐことができた。皇太子が冬の催しで自分をおびき出そうとしたことに、彼は驚きを隠せなかった。この催しに参加すれば友人に会えるし——将来の薪の配達人を見つけられる！　だがエッカーマンは全く急いでいなかった。ハノーファーに留まって最終決定を保留した。ワイマルに帰るという犠牲を払えば当地での借金から解放されるが、まだ裁判費用が残っていた。ワイマルよりも安く暮らせるハノーファーで慎ましい節約生活をしていなければ、どうやって裁判費用を支払ったらいいのだろうか？

エッカーマンの帰郷を可能にしたのは、ワイマルの儉約家のパトロン達が「用意周到に」⁽⁴⁶⁾ 彼の住まいを解約させたからではない。それを可能にしたのは、ほとんど期待していなかったある幸福な状況が訪れたからである。1845 年 9 月 22 日、ドレスデンの上級控訴審裁判所が、ブロックハウスに対するエッカーマンの行動は決して不当なものではない、と判決を下したのである。この出版者の無罪判決には全く変更はないが、少なくとも二三百ターラーかかる裁判費用をエッカーマンから免除する、という内容だった。計 280 ターラーという二倍に膨らんだ弁護士費用によって、彼はすでに十分なほど損害を被っていた。この判決は実際に彼を破産から「救済」した。こうして彼は返済できる見込みもない借金の重荷から解放され、このハノーファーでの最後の冬の間、存分に体を休めることができたし、執筆に取り組めたのだった。

ワイマルの頑固な債権者達は、自分達の 300 ターラーのために人間を丸ごと占有しようとして、ゲーテ時代の観光名所を手放したがいなかったが、エッカーマンは彼らの気持ちを変えようと最後にもう一度試みた。またフォン・ミュラー長官に対して、自分に自由を与えてほしいし、故郷に留まって自分で選んだ孤独に耽らせてほしい、そういった気持ちを大公妃に伝えてほしいと懇願した。1846 年 5 月 2 日の返事はこうだった。大公妃はこの点についてすでに明言されていたので、もう一度あなたの希望を伝えるという賭けに出ることはできませんでした。その反対です。遅くとも一週間以内に戻って来て、旅行費用を返却せよとのことですよ！　フォン・ミュラー長官も——ワイマルの人々も「リュネブルクの荒野からやって来たお人好しの田舎者」に好意を持っていて、彼が故郷で「意気消沈して、肉体的にも道徳的にも落ちぶれてしまう」のを心配していた。ただ彼らは、彼みたいな自然児は檻の中では腐っていかざるを得ない、ということに理解が及ばなかった。この自然児がお金に恵まれていたら！　だが長官の返答もまた、後戻りできない将来に対して漠然とした約束を述べるにすぎなかった。

自分の年金を危険に晒したくなければ、エッカーマンはこの度重なる執拗な呼び掛けに好むと好まざるとに関わらず従わざるをえなかった。休暇は尽きてしまったのだ。ほとんど二年間ワイマルから遠ざかっていたが、こうして自分の故郷に別れを告げ、もう一つの故郷に足を踏み出した。だが彼は自分の故郷で落ち着いて仕事に集中し、幸福な日々を過ごせたことに感謝していた。それは『対話』第三巻の主要部分が出来上がったからだった。

34. 刑事訴訟

1843年初め、エッカーマンはグスタフ・シュヴァープの『シラーの生涯』を読んで、次のような注を見つけてびっくりしてしまった。『ゲーテとの対話』の中に、シラーがスウェーデンから戻って来たという記述があるというのだ。もちろんそれは誤植でシュヴァーベンが正しい。彼は手持ちの一冊を調べた。正しく「シュヴァーベン」と書いてある！ このシラーの伝記作家が読み間違えたのだろうか？ 公的な正誤表を出すくらいなら、ちゃんと見直しておいた方がいい！ 『対話』の第二刷はこの世にはなく「第二版 (zweite Ausgabe)」⁽⁴⁷⁾ だけがあったが、それはブロックハウスと取り決めた全発行部数 3000 部の残りの半分以外の何物でもなかった。そこに何か別のことが書かれているはずはない！ この第二版を調べてみて、エッカーマンは自分の目が信じられなかった。実際、シュヴァーベンでなくスウェーデンと書かれていたのだ！ このページだけが印刷し直されたなんてあり得ない！ だから彼は他の箇所も比較してみた。彼の眼差しは不信感で敏感になっていたが、最初のテキストと第二版を比較してみると些細な変更が沢山見つかった。名目上の「表題版 (Titelaufgabe)」⁽⁴⁸⁾ の全紙を開けてみると次のことが判明した。第一巻の新しい扉ページが以前の場合にはなかったし、第二巻の巻末にある索引も事後的に添えられものではなく、一緒に印刷されたものだった！ これが「表向きだけの新版」⁽⁴⁹⁾ であることをエッカーマンも確認していたし、そのことは手紙の至る所で言及されているが、初刷の「在庫の」⁽⁵⁰⁾ 残部などではなく、エッカーマンの背後で行われた完全な新版だったのだ！ だがすでに 1836 年 12 月に新版が必要だったのなら、ブロックハウスはエッカーマンと取り決めた 3000 部を当時売り切っていたことになる。それ故、1836 年には 946 部、1837 年には 576 部の売り上げがあったと報告された決算書は誤りだったに違いない。そういうことであれば 1837 年の決算書にある非常に気まずい数字も説明がつく。当時ブロックハウスは、差し当たり 140 部しか売り上げがなかったと報告していたのだ。エッカーマンは非常に好意的で控えめな返信を書いて自らの失望を表明し、各地の書店員が教えてくれた『対話』の売り上げ部数に言及したのだが、ライプツィヒのブロックハウスに簡単にあしらわれてしまった。それは敢えて売り上げ部数を数え直してくる著者に対して、書店員がしたくなるようなあしらい方だった。もっともエッカーマンは場合によってはブロックハウスが手ごわい相手となるので、自分のことをよろしく願ひします、と伝えたのだったが。そのような苦情に全く根拠がなかったにしても、そういった種類の手紙はいつもある種の「文体」で始まるものである。そうすることで苦情を言ってきた人間をまず悪者にするのだ。だから 1838 年 10 月 19 日付のブロックハウスの返信も冷淡な書き出しで、極めてもったいぶった無味乾燥なドイツ語で書かれ、有無を言わさぬものだった。「同月 11 日付の貴殿の投書を拝受いたしました。率直に告白しなければなりません、この投書の文体は当方をいくらか感情的に揺さぶるものでした。」⁽⁵¹⁾ しかしながら、書店員が述べたことや「あなたの御友人の称賛」⁽⁵²⁾ などは売れ行きの尺度とはなりません。あなたの『詩集』の失敗が、今ではその「悲しい証明」⁽⁵³⁾ となっていますし、お示した決算書に全く変更はございません。――

エッカーマンがそれに納得することなく二ヶ月の時が過ぎた。しかし融和的なクリスマスの雰囲気

も考慮して、12月23日付の全く別の「文体」を持つ告白が届いた。エッカーマンは完全に正しかったのだ。1837年に販売されたのは140部ではなく576部だった。だからブロックハウスは581ターラーを追加で支払わねばならなかった。だがそれ以来、売り上げ数は年々減少していったので、この本は明らかにブロックハウス社では適切に扱われなくなっていた。だからエッカーマンは、1841年、計画していた第三巻をコッタに提案した。必要な発行部数を算出するために、コッタは書籍業者に手当たり次第、第一巻と第二巻の売り上げに関するアンケートを行った。70名の書籍取次販売業者しか回答してくれなかったが、彼らは総計で762部を販売していた。ドイツには800名の書籍業者がいるので、ブロックハウスによってこの七年で報告された1884部という売り上げ数をはるかに凌駕する確率が、計算上は生じることになる。だがエッカーマンはまだこの1841年時点で何ら疑念を抱いていなかった。

ところが彼は1843年になって突如自分が何も知らなかったし、間違いなく自分に知られてはいけなかった第二刷の存在を突き止めることになり、すべてが全く違って見えるようになった。ブロックハウスの決算書が示す得体のしれない謎が一気に氷解したように思えたのだ。彼は自分の発見を友人や知人、法律家や書籍業者に伝えた。最初は誰もがそれを信用せず笑った。ブロックハウスのような会社が？ だが立証方法や反論の余地のない第二刷の存在や文通内容を吟味してみると、どんな疑いも消え去っていった。ここで一つの手本が打ち立てられねばならない！ エッカーマン自身と、海賊版に苦しめられてきたドイツの著作が負うべき義務なのだ！ 出版者のフロムマンだけが、70名の書籍取次販売業者の言葉は信用できないと警告した。助言者が大勢いた中で、フロムマン以外には誰も他の可能性があることを指摘しなかった。アイゼナハのフォン・ヴィーデンプルック博士がこういったセンセーショナルな裁判を扱うに相応しい人物だった。彼はあらゆる抑圧された者の弁護士で真の国民だった——この人物だけがライプツィヒの蜂の巣をつつく勇気を持っているのだろう。だからエッカーマンは彼に代理人を委嘱した。

だがどんな方法を取ればいいのか？ 民事訴訟、それとも刑事訴訟？ 民事訴訟は時間や費用もかかり面倒だった。というのも、民事訴訟の原告は被告が自分を欺いたことや、それがどの程度だったかを証明しなければならなかったからである。不当な新版があることだけは差し当たり証明することができる。それがどの程度だったかは営業帳簿から分かるが、ブロックハウスが原告にそれを見せることは絶対ない。それを強要できるのは検事だけである。だから弁護士は絶対に刑事訴訟するよう勧めてきたし、エッカーマンも法律を信頼する意識もあってこれに同意した。

もしブロックハウスが自分の不正に気付かれると分かっていたら、自発的に相応の賠償金を支払うだろう。だからまずヴィーデンプルックは和解を試みた。しかしブロックハウスは怒りを露わにしてこう述べた。私は一ペニヒだって払いません。出版社として権利を認められた3000部以上は絶対に印刷していません。確かに一度に全部印刷したのではなく、まず1500部だけ印刷しました。そしてこの本が予想に反して「売れて」いってから、残りの1500部を印刷しました。ブロックハウスは刑事裁判所に対して、帳簿で自らの主張を裏付けて、あらゆる質問に対して納得のゆく回答をしたので、裁判官は1843年5月24日、審理手続きの開始を認めなかった。

原告のエッカーマンはこれに納得できたろうか？ 十分に準備された弁解に対して心の準備はできていた。新版に対するこのような説明は単純に信用できず、真面目に受け取ることなどできなかった。ブロックハウスが書いた手紙の内容とこの説明は全く矛盾していて、詐欺のあらゆる証拠が一つも拭かれていなかったのだ。ヴィーデンプルックは依然としてこの出版者に罪があると信じて疑わなかったし、この件を引き継がねばならなかったライプツィヒ在住のプラント博士も同意見だった。刑事訴訟でなければ、この詐欺の全容を突き止めることなどできなかった。審理を開始するにあたって裁判所を動かすには「客観的な証拠」が必要だが、私訴原告では全ドイツの書籍業者を証人として尋問することなどできない。立ち会いを求められた鑑定人の一人で、K. F. ケーラー社の社長フランツ・ケーラーも同じく詐欺を信じて疑わなかった。彼の忠告はこうだった。まず第三巻を出版してくれる人を探さない。その人なら第一・二巻の売り上げについて再度アンケートをしてくれるでしょう。だが第三巻の原稿はまだ完成には程遠い状態だった。この時エッカーマンは何年も続くであろう裁判に自分が巻き込まれたのが分かった。新たな和解手続きをブロックハウスははっきりと拒否した。自分がエッカーマン宛の手紙の中で事実を曲げていないのを証明して見せればいいだけのことだ。またブロックハウスは帳簿に記載された売り上げ一覧表の開示も拒否した。ちょっと調べられたら自分に非があることを相手側に突き止められてしまう。勝利を確信しているブロックハウスは、すでにこの件への関心を失っていた。反対にエッカーマンは要求を撥ねつけられて、しばらくの間は証拠集めに大金を使うことになった。ともかくこの訴訟手続きは継続されねばならなかった。

なぜブロックハウスは1836年に正直に言わなかったのだろうか？ 3000部は危険が大きすぎるので、まず1500部だけ印刷します、と。そうすればエッカーマンは自分で新版の校正もしただろうし、「シュヴァーベン」でなく「スウェーデン」としてしまうような馬鹿な誤植も避けられたはずである。細かな文章の修正もしただろうし、すべてが順調に進んでいたはずだ。なぜブロックハウスはエッカーマンを騙して、いわゆる「表題版」と思わせたのだろうか？ 著者自身の目から見ればそれはこの本の信用を落とす操作であり、この本の売れ行きはよくない、ということをおからさまに示す行為だというのは。だがなぜこんなことをしたのか、誰も満足のゆく回答を得られなかった。誰もがエッカーマンと同じ疑問を抱いたが、それは「全くの犯罪行為には見えなくても、どう考えたって明らかにおかしい」⁽⁵⁴⁾ ことだった。裁判前にブロックハウスは一つだけ回答してきた。第二刷を通知することに関しては「直接的に示唆するものはありませんでした」と。換言すれば、出版者の商売上の措置は著者とは何の関係もない、ということだった。ブロックハウスは自分を有罪にするだろうか？ また確かに契約の文面に違反していないが、契約の趣旨に違反したことを自分で指摘するだろうか？ エッカーマンは契約を結ぶ際、3000部を印刷する「権限」⁽⁵⁵⁾ を、一度にこの部数まで製本するという意味でのみ理解できていたし、契約によれば「出版許可」がなければ全紙を印刷してはいけなかったもので、いずれにしても第二刷について知らせてもらう必要があった。しかし裁判所はそれについて質問しなかったで、被告は事細かに説明する機会もなかった。ライプツィヒの予備審の手抜き仕事が目立っていたので、エッカーマンとその助言者の不信感が揺らぐことは全くなかった。反対に、当地の裁判所が影響力の大きい出版者に歩み寄っているような雰囲気があったし、明らかな違反——文通がそれ

を証明している——があってもその雰囲気が損なわれていないように見えたので、根本的な審理を要求するという気持ちがエッカーマンの中で強くなっていったに違いない。

一方でエッカーマンは窮地に立たされていた。書籍販売業者へのアンケートを彼は私人として行うことはできなかったし、出版業者に前面に立ってもらうこともできなかったのだ。第三巻の原稿は完成には程遠かったし、読みもしないうちから契約してくれる出版業者などいるはずもないからである。それにどの商売人も売り上げに難点があるに違いないと口にした。エッカーマンは自分の本の不運を考えて怒りに震えた。「ゲーテという偉大で自由で心地よい存在」に隠れた「静かな影の喜び」⁽⁵⁶⁾などあっていいのだろうか？ そんなことを考えている時、彼はワイマルで危機的な状況に陥っていた。だから7月にはハノーファーへ逃亡した。どうやって生きていけばいいか分からなかったのだ。裁判費用も途方もないものとなっていた。9月16日、刑事裁判所は審理の継続と売上簿の提出をはっきりと拒否した。それに対して原告は異議を唱え、ようやくライプツィヒ控訴裁判所は、11月1日、次のように説明した。予備審は「明確な決定的事実」⁽⁵⁷⁾を明らかにしていない。「正式のものではないが、実質的な観点からすれば謝罪の可能性」⁽⁵⁸⁾のあるものを明らかにしているだけである。というのも、エッカーマンはブロックハウスによって間違いなく「いくつかの方法で騙されて」⁽⁵⁹⁾いたからである。それ故、刑事裁判所は「原告の申し立てに従って、意思表示をしなければならない。」⁽⁶⁰⁾ そのように控訴裁判所は述べたのである。これでようやく一步前進というわけだ！ エッカーマンは少しほっとして、ハノーファーで第三巻の執筆に熱中した。だが刑事裁判所は新たに表面的な審理を行って、再度、次のような判決を下した。つまり、これまでの捜査によって十分に事実関係が明らかにされているので、売上簿の引き渡しすら被告に求めることはできない。場合によっては、原告の方が自分にとって不利な証拠資料を提出しなければならない、と。

この判決はエッカーマンを民事訴訟の原告へと押しやるものだった。刑事裁判所は要求されていたような「職務上の事実構成要件を捜査」⁽⁶¹⁾しようとしなかったので、エッカーマンは1841年にコッタが行ったアンケートで得られた70枚の書籍業者の紙片を手渡さねばならなかった。これらの回答が信頼できないものであることを示すには、抜き取り調査を七つすれば十分だった。ライプツィヒの書籍販売業者エンゲルマンの所では『対話』はたった一部しか売れなかったが、40部と届け出ていた。そうすることでエッカーマンから「これ以上の謝礼をせびり取ろう」⁽⁶²⁾と考えていたのだ。刑事裁判所はこの件を処理済と見做し、更なる申し立てと異議を拒否した。こうして6月26日、控訴裁判所は11月1日の認識とは完全に矛盾する次の判決を下したのだった。ブロックハウスは騙したり嘘をついたりしていなかった。一方、エッカーマンは自らの誤りを認識していなければならなかったし、彼は告発することに固執していた。こうした「執拗な態度」のために、エッカーマンは全裁判費用と弁護士費用を負担しなければならない、と！ それどころか控訴裁判所はこう付け加えた。「技師でもなくとも誰もが」⁽⁶³⁾ 残りの1500部が新版だとすぐに分かったに違いありません。またブロックハウスは1836年10月11日と11月26日、初版の「まだ仮綴じされていない半分」⁽⁶⁴⁾を「表向きだけの新版」として出版しようとしているとあなたに書いており、そこに矛盾はありません。その「表向きだけの新版」を、今になって突然、素人たちが正真正銘の新版だと騒いでいるのです！ さらにこ

の新版が1836年の秋にはすでに完成していたというブロックハウスの言葉は信用できる、と説明した。だが実際にはこの出版者の帳簿の一つに、この本のための紙の配達が「1836年12月」と正確に書かれていたし、あらゆる付随的状况を考えてみても、新版がもっと早くに出来ていたことなどありえないのだが。また控訴裁判所は、ブロックハウスが1836年10月にワイマルを訪問した際、エッカーマンにこの実情について知らせていたということさえ是認した。だがその後もブロックハウスとエッカーマンが手紙のやり取りを行い、隠語として取り決めていたかのように依然として「表向きだけの新版」について話し合っていることを少しも疑問に思わなかった。控訴裁判所は本の植字と印刷の違いさえ理解していなかったし、1500部の製本を二回行うのは、3000部の製本を一回行うよりほんの僅かしか費用がかからないと平然と信じていたのだ！ 印刷所の支配人フリードリヒ・ブロックハウスも法廷でそれを断言している。その一方で弟のハインリヒは日記の中でこう述べている。残念ながら二回印刷すると製本する手間がかかり、その結果として「店頭価格が非常に高く」⁽⁶⁵⁾ になって、売り上げを侵害してくるのです、と。裁判所がこうした全ての個別質問に目を向けず耳を塞いだ結果、この「執拗な態度」を取る原告に全費用の支払いを命じるという処罰が加わったのだ！

もっともドレスデン上級控訴裁判所はこの途轍もない判決に組しなかった。この裁判所は、ライプツィヒ控訴裁判所に対して、自らが下した11月1日の適切な判決を参照するよう指示し、1845年9月22日、次の判決を下して裁判を締めくくったのだった。「この密告者が主張する際に用いた実際の資料は偽物でも改変されたものもありますが、ただそれに結びついた推論は誤ったものでした。」⁽⁶⁶⁾ その上、疑わしい状況が重なり「奇妙なものとなってしまったので、騙されたという考えが沸き上がってきたのでしょう。」⁽⁶⁷⁾ こうして控訴裁判所は裁判費用のほとんどを国庫に負担させた。エッカーマンに帰せられた計り知れない被害の責任を、ブロックハウスに負わせるのが正しい方法だったのかもしれない。泥棒に扮した者はそのような扱いを受けて当然なのだ。ブロックハウスは誤った主張をしていて、詐欺の疑いを示す状況証拠さえあったのだから。確かにブロックハウスは勝訴した。だが道徳的には敗者なのだ。

というのも、裁判によって生じた損害はエッカーマンにとって甚大なものだったからである。彼は仕事の遅い人だったし、よく病気になって、幸福に過ごせる時がやって来るのを待たねばならなかった。彼自身『対話』の第三巻の前書きでこう述べている。「私の精神が日々の生活に絡めとられて、ゲーテに対して無感覚となってしまう、ゲーテの方でも私の精神に言葉をかけることもなく、しばしば何ヶ月も過ぎていきました。」⁽⁶⁸⁾ 日々の生活に絡めとられていた中で最も面倒だったのはブロックハウスとの裁判だった。ほとんど耐え難い三年間、この裁判が彼の上のしかかっていた。弁護士のように書類に噛りつき、次々に届く訴答書面にげんなりするまで同じことを繰り返さねばならなかった。もし裁判に負ければ、漠然とした不安、浮き沈みする緊張、経済的な心配、みじめな300ターラーの俸給を巡るワイマルとの闘い、日々増してくる暗澹たる気持ち、そういったものが加わってくるのだ！ もしそうになってしまったら、どうやってライフワークを完成させられるというのだろうか？ エッカーマンには危機が迫っていた。というのも、思い出という棘から聞こえてくるゲーテの声が年々弱くなっていったからで、最も鮮やかだった記憶さえも毎日の全く違った印象の中で見分けられなくなり、次

第に色褪せていかざるを得なかったからである。最終的に第三巻の完成が大幅に遅れてしまえば、その成功を台無しにしてしまうに違いない。だからブロックハウスの虚偽によってエッカーマンが強いられたこの呪われた裁判は、二度と埋め合わせできない精神的及び財政的な損害を与えたのである。

ブロックハウスは敵を打ち負かしたことで満足しなった。とことんやってきたのだ。つまり『ゲーテとの対話』の著者は不名誉扱いにされ、今後の書籍販売の資格を失って当然である、と言ってきたのである。ブロックハウスは全裁判記録を公表して、その前書きでこう述べた。「ある一人の男とつながりがあったことを、私の経営活動の中の最も嫌な出来事と見なさざるを得ません。その男は自分の作品に自惚れていたために、私に対してそんな態度を取ることができたのです。」⁽⁶⁹⁾ この男と関わらないよう全同業者へ警告する意味合いが、この言葉にははっきりと込められている。ブロックハウスはこうした陰險な攻撃をした後で、法律上は認された自らの無罪という誇りを意識しながら、同情したふりをして彼を蔑み、こう述べた。「名誉棄損と誤った告発」⁽⁷⁰⁾ という理由でエッカーマンを訴える権利があるかどうか (ob)、我々出版者は「決められません (dahingestellt)」⁽⁷¹⁾ ——我々は「彼自身の感情に」⁽⁷²⁾ 身を委ねていますし、「最も名誉あるやり方で下された完全無罪判決」⁽⁷³⁾ に自らの「正当性と安心」⁽⁷⁴⁾ を見出しています、と。こうしてエッカーマンは、自分で罪を負う覚悟のない軽はずみな告発者とか惨めな誹謗中傷者と見做されることになったのだが、ここで注意しなければならないのは、注意深い弁護士が使う「～かどうか」とか「決められない」という表現が用いられていることである。これはいつもと同じ道順で、辛辣な「書籍紹介文」を有難がる新聞雑誌へと辿りついていった。一方、ブロックハウスのように自由に印刷機を使えないエッカーマンはそれに対抗できなかった。エッカーマンよりも力のあるブロックハウスは、さらに自分が太っ腹なのをちらつかせ、名誉棄損の訴えを取り下げた。ブロックハウス自身によって報告された書類の中でも最重要で最後に提出された書類、つまり上級控訴裁判所の判決は、そのような訴えをする権限を彼から取り上げていたにも関わらずである。エッカーマンはこの裁判を軽はずみに行ったわけではないし、上級控訴裁判所も出版社に「騙された」と信じるに足る根拠があるとはっきり認めていた。

エッカーマンがブロックハウスの論駁書を目にしたのは、ちょうどハノーファーからワイマルへ戻った時だった。第二の「故郷」に戻って来てこの地に定住した後、無理にでもやらねばならなかった最初の仕事は、これに回答することだった。その一方で、彼は第三巻をブロックハウスに依頼しなければならなかった。というのも、自分のライフワークの最終巻が孤児のようにこの世をさまよいつくのは計り知れない損失だからである。確かにいくつかの申し出がないわけではなかったが、手近な誰かにこの最終巻を任せたくはなかった。新しく題名を付け、独立した本として出版した方がいいのだろうか？ そうするには彼はあまりにも正直すぎたし不器用すぎた。以前の題名はある種の知名度もあって、第三巻にプラスになるに違いない。第一・二巻をブロックハウスから完全に剥ぎ取ってしまうことくらい少なくとも可能ではないだろうか？ このように検討したということは、彼が合意を模索していたということを物語っている。一方でブロックハウスは、あなたと新たに契約を結ぶことは考えていません、と軽蔑するように返答し、こう付け加えた。「あなたとの思い出をすべて消し去ってしまいたい」⁽⁷⁵⁾ と願っていますし、あの第一・二巻の代わりに私が契約上与えられてしかるべきも

のを要求します。新しい版をあなたと一緒に作ることは絶対にないでしょう。ですが、あなたの『詩集』は喜んで「屑のような値段」⁽⁷⁶⁾でお譲りします。あなたと「関係のある」⁽⁷⁷⁾ものだからです。こうして合意は不可能となった。その後ブロックハウスは、この手紙のやり取りも裁判記録とともに公表した。

エッカーマンはたった 18 ページに自分の反論をまとめたが、その最後にこうした前代未聞の無思慮を取り上げて、堂々たる文章をいくつか添えたのだった。彼は短く具体的に、最後の手紙で自分が言いたかったことを説明し、ブロックハウスと可能な限り緩やかな関係を持つことのもっともな理由を述べた。そして最後に次の言葉で締め括った。「愛想よく礼儀正しい文章を書けばよかったのでしょうか？ いえ、そうしなくても罪にはならないと思います。私は特別な高みからなされていない大雑把な返答を絶対に書きたくはありませんでした。少なくともそうすることで、自分のことを世に広めたいのです。」⁽⁷⁸⁾

作家と出版者との対決にはいつも一人の死者が出る。つまり本そのものである。エッカーマンは『ゲーテとの対話』の実際の第二版を経験することはなかった。それは彼の死後出版されたが、別の出版社からではなく同じブロックハウスからだった。ブロックハウスは 1845 年のエッカーマンとの対決を「経営活動の中の最も嫌な出来事」と呼んだが、結局、エッカーマンのライフワークから離れられなかった。後にこの第三巻を追加購入さえしたし、この本はごく最近まで、ブロックハウス社の中でも最もよく売れる出版物の一つだった。^{原注)}

原注) 参照:『エッカーマンのゲーテとの対話』第 21 版 (オリジナル版)、第一刷・第三巻のオリジナル原稿・エッカーマンの手稿に依拠、H. H. フーベン編集、158 枚のイラスト入り、ライプツィヒ、F. A. ブロックハウス社、1925 年

本稿は H. H. Houben: *Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen*. Berlin / Wien / Leipzig (Paul Zsolnay) 1934 の第 32 ～ 34 章を訳出したものである。第 31 章までは以下を参照のこと。

林久博:「翻訳: H. H. フーベン『ゲーテのエッカーマン——ある控え目な人間の伝記』(8)」、『教養教育研究院論叢』第 4 巻・第 1 号、中京大学教養教育研究院、2023 年、83 ～ 93 頁。

注:

- (1) Houben, Heinrich Hubert: *J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt*. Teil 2. Hildesheim (H. A. Gerstenberg) 1975, S. 479. [Eckermann an Schrickel (10. 11. 1844)]
- (2) Petersen, Julius (Hrsg.): *Mitteilungen aus dem Briefwechsel zwischen Carl Alexander und von Sachsen-Weimar und Johann Peter Eckermann*. In: *Jahrbuch der Sammlung Kipperberg*. Bd. 2. Leipzig (Insel) 1922, S. 28. [Karl Alexander an Eckermann (23. 8. 1844)]
- (3) Ebd.

- (4) Ebd., S. 29.
- (5) Ebd., S. 28.
- (6) Ebd., S. 29. [Eckermann an Karl Alexander (21. 10. 1844)]
- (7) Ebd.
- (8) Ebd.
- (9) Ebd.
- (10) Ebd.
- (11) Ebd., S. 32.
- (12) Ebd., S. 31.
- (13) Ebd.
- (14) Ebd., S. 32.
- (15) Ebd.
- (16) Ebd.
- (17) Ebd.
- (18) Ebd.
- (19) Ebd., S. 32f.
- (20) Ebd., S. 35.
- (21) Ebd.
- (22) Ebd.
- (23) Ebd., S. 37. [Eckermann an Karl Alexander (22. 10. 1844)]
- (24) Ebd.
- (25) Ebd., S. 38.
- (26) Ebd., S. 40. [Karl Alexander an Eckermann (27. 11. 1844)]
- (27) Ebd., S. 41f.
- (28) Ebd., S. 40.
- (29) Ebd., S. 42. [Karl Alexander an Eckermann (19. 1. 1845)]
- (30) Ebd.
- (31) 「慈悲深いサマリア人」とは、苦境にある人に手を差し伸べる人のことを指す。
- (32) Petersen, a. a. O., S. 48. [Karl Alexander an Eckermann (5. 5. 1845)]
- (33) Ebd.
- (34) Houben, a. a. O., S. 524. [Eckermann an Karl Alexander (26. 10. 1845)]
- (35) Ebd., S. 525f.
- (36) Ebd., S. 526.
- (37) Ebd.
- (38) Petersen, a. a. O., S. 49. [Karl Alexander an Eckermann (5. 11. 1845)]
- (39) Ebd.
- (40) Ebd.
- (41) Ebd.
- (42) Ebd., S. 29. [Karl Alexander an Eckermann (23. 8. 1844)]
- (43) Ebd., S. 49. [Karl Alexander an Eckermann (5. 11. 1845)]
- (44) Houben, a. a. O., S. 526. [Eckermann an Karl Alexander (26. 10. 1845)]
- (45) Ebd., S. 545. [von Müller an Eckermann (2. 5. 1846)]
- (46) Ebd., S. 537. [Eckermann an Schrickel (9. 11. 1845)]

- (47) Tewes, Friedrich(Hrsg.): *Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß*. 1. Band. Berlin(Goerg Reimer) 1905, S. 338. [Eckermanns Entgegnung auf Brockhaus (27. 5. 1846)]
- (48) 「表題版 (Titelaufgabe)」とは、タイトルページだけ変更して再版したものを指す。
- (49) Tewes, a. a. O., S. 336.
- (50) Ebd.
- (51) Houben, a. a. O., S. 560. [Buchhandlung F. A. Brockhaus an Eckermann (19. 10. 1839)]
- (52) Ebd.
- (53) Ebd.
- (54) Ebd., S. 589. [Eckermanns Randbemerkungen zum Vernehmungsprotokoll]
- (55) Brockhaus, Friedrich / Brockhaus, Heinrich: Ueber die Verhältnisse der Buchhandlung F. A. Leipzig zu Herrn Hofrat Dr. J. P. Eckermann in Weimar in Beziehung auf das Werk „Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens.“ Aus den Acten zusammengestellt und als Manuscript gedruckt. Leipzig 1846, S. 5.
[https://books.google.co.jp/books?id=RhdlAAAcAAJ&pg=PP5&hl=ja&source=gbs_selected_pages&cad=1#v=onepage&q&f=false]
- (56) Houben, a. a. O., S. 523. [Eckermann an Karl Alexander (26. 10. 1845)]
- (57) Tewes, a. a. O., S. 343. [Eckermanns Entgegnung auf Brockhaus (27. 5. 1846)]
- (58) Ebd.
- (59) Ebd.
- (60) Ebd.
- (61) Houben, a. a. O., S. 596. [Eckermann an Brandt (28. 3. 1845)]
- (62) Brockhaus, Friedrich / Brockhaus, Heinrich, a. a. O., S. 77.
- (63) Ebd. S. 41.
- (64) Tewes, a. a. O., S. 336. [Eckermanns Entgegnung auf Brockhaus (27. 5. 1846)]
- (65) Houben, a. a. O., S. 611.
- (66) Brockhaus, Friedrich / Brockhaus, Heinrich, a. a. O., S. 108.
- (67) Ebd.
- (68) Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832*. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 502.
- (69) Brockhaus, Friedrich / Brockhaus, Heinrich, a. a. O., S. IV.
- (70) Ebd.
- (71) Ebd.
- (72) Ebd.
- (73) Ebd.
- (74) Ebd.
- (75) Ebd., S. 110.
- (76) Ebd.
- (77) Ebd., S. 111.
- (78) Houben, a. a. O., S. 346. [Eckermanns Entgegnung auf Brockhaus (27. 5. 1846)]